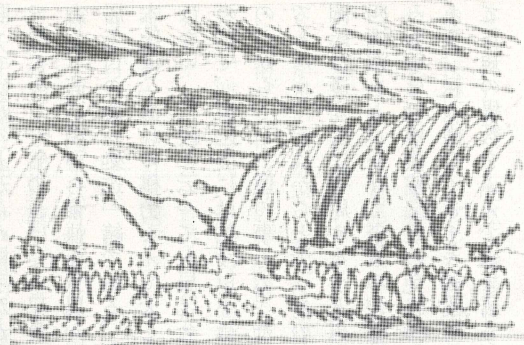


漫描 囲碁太平記 (第四話)

(一)

古典歌舞伎の世話物「碁太平記 白石噺」と云へば宮城野信夫の孝女仇討物語を筋書きにした有名な芝居の芸題である。奥州仙台白石村の地名を碁石に見立てて碁太平記としたものだが、同じ太平記でもこちらの方は全然趣向が違う。私の囲碁噺はさしづめ現代版「返り討 怨みの黒石」とでも云う事にして置こう。私の事務所へは常時、多数の棋友が入り替り立ち替り荒しに来る、何れ劣らぬ辰巳会の天狗連が主流で、この噺に登場する人物群像も殆ど我が会のメンバーである。事務所と云へば聞こえがよいが格別仕事と云う程の仕事がある訳でもなく私の他には雑使女が二人居るだけの小部屋で、一応形ばかりの帳簿書類等並べてはあるが格好だけの見せかけと思つてもらつて差し支えがない。そんな中で忙しいと名のつくものは碁盤と碁石位で、これは酷使に耐えて居ると云つた案配。石など満身創痍、満足なのは一つもない様な有様である。



Stormy harvest Pen drawing Bernard Leach 1953.

慢だが、頭をひねるのは会員の段級格付けである。最初の頃は大体この位であろうと手合い割りを作り、競技会の成績に依じて、ほぼ、段級を格付けして来たが会で優勝するか、又は連続して好成绩を挙げると、お角力さんの番付けの様に昇段する仕組になつて居る。但し、プロの角力取りと違う点は一度昇段したらその後成績が悪くても降段すると云う事がない。十年近く三十回以上も会をやつてくると完全な昇段インフレになつて、今や会員は全部有段者になつてしまつた。一級だの二級だの、おかしくつて名乗る訳に行かない。そして、最高五段六段を擁して三段

私は毎朝、しかつめらしく定刻には家を出る事にして、さも、用事ありげに振る舞うのだが、一番末の孫娘の一発にあえなくダウンしてしまふ。「お爺いちゃん毎日会社へ行つてボタンを並べて居やばる。お爺いちゃんのは真黒けのボタンばつかりや……」。孫娘は或る時、たまさか事務所へ遊びに来たのにも拘らず、私が対局に熱中して彼の女を疎外したのを根に持ち、それからと云うものは二言目に斯く評するのである。私は早くもこの孫に一目置かされた破目になつて心中がすかに恐れをなして居る。私の処に碁客が多いのは以上の様に事務所とは名ばかりで殆ど用事らしい物もないから仕事の邪魔をされる懸念もなく、来る方も時をかまわず押しかけて来るが実は他にもつと大きな要因があるのである。それは何かと云うと私としては一寸書きづらい事だが、実は来る客の殆どが赫々たる戦果を収めて意気揚々として帰るからである。つまり私がよく負かされ皆からすつかり舐められて、「彼奴とやるのが一番気楽で骨が折れん、暇つぶしには持つてこ

四段クラスが数名、あとは皆二段初段である。口悪がない囲碁雀ではないが人呼んで之を辰巳段位と云う。一寸見には何如にも安手の粗製濫発の様に聞えるが、又しかし、暗示と云う物は妙なもので有段者の仲間入りをしたとなると皆そこ／＼に腕前が上つて行くから不思議だ。私も永の年月、たつた一度だけでも優勝した事がある。持ち廻りのトロフイに麗々しくベナントをぶら下げて鬼の首でも取つた様に人目のつく処へ飾つて悦に入つて居たのだから、はたから見れば随分お目出度い風景であつたであろう。それが病みつきで私も遂に初段格に入れてもらう事になつた。勿論一般世間では通用しそうなない棋力だが、それでも尋ねられると「エ、まあ、お情けの初段で……」と謙遜とも自慢ともつかぬ事を云つて居る内に自分自身すっかり錯覚を身につけてしまつた。よせばよかつたのに自惚れもいゝ処だが神ならぬ身のこれが恥の上塗りの命取りにならうとは知る由もない。その内に退つ引きならぬ事になつてしまつた。昇段の爲めに手合割りが變つて来て、今迄、早くから実力初段で付け出して来た志智繁太郎、下雅意亀吉、宇津木亥一先輩諸氏と

いだ又一泡ふかせてやるか」と好き放題な太平楽を並べつつ追々客足がふえる様になつたとは是非もない次第である。大体、お客の大部分が私には先輩ばかりだから私たる者、矛先も鈍らうと云う物ではないか。初めの内、「お客を遇する為に……」とか「自分の陣営で勝負をするのは気が散つて……」とか、色々口実を設けて負け惜しみを並べて居たが、それもしまゝには通用しなくなつてしまつた。一寸見渡しただけでも、今村冬二郎氏(囲碁部筆頭世話人)に四連敗、橋本知一郎氏(同世話人)には屈辱的な七連敗と云う記録がある。こんな無惨な目に遭わねばならん様になつた遠因の一つに辰巳会囲碁部の機構にも何がしかの理由が潜在するのであるが、だからと云つて私はそれを他に転嫁し様等とさもしい考へは些かも持つて居ない。が、事の成り行き上、一応、辰巳会囲碁部の性格だけは知つて置いてもらい度いと思うのである。

(二) 辰巳会に囲碁部が出来てから数えて三十二回も競技会をやつて来た。その時その時に依じて様々に会場を替へたり遠出をしたり、花見を兼ね避暑を兼ね、一泊旅行等数え切れぬ

互先で打たねばならない。武井一郎や橋本賀一郎には平常、黒でも旗色が悪いのに握りの具合で白番になる様な珍現象が起きた。結果は明らかである。茲しばらく、惨敗に惨敗が続いてしまひには碁盤を見るのさえないやになつてしまつた。よくしたもので武井も橋本賀も其の内成績が上がつて直ぐに私を追い越してはくれたが、納らないのは一度付いた負けぐせである。必然的に私の牙城にも火がついて来て来る客／＼が皆私をねじ伏せ、我が道場は敵の蹂りんにまかせの他ない仕議とはなつた。私は遂に看板を書き替へる事にした。「私は自分がそんなに弱いとは思わんがよく負けるので皆が来てくれるんだと思う。私が強かつた日には客足もぐんと落ちるだろう。負ける」と云う事も時に取つて悪くないものだ。と負け惜しみも此処迄来ると詭弁とナンセンスの固りの様で些か忸怩たらざるを得ない。私は之を碁の敗戦哲学だと自称して居る。

程楽しんで来た。最も通常の例会は亡くなられた三島宗治氏の御好意で大阪神鋼ビルの和室大広間を使わせてもらつて居たが神鋼ビルの改築を機会にそれ以後北浜の関西棋院で一番数多く例会をやつて来た。関西棋院は云う迄もなく、我等の大屋晋三氏が総裁で、東の日本棋院に一步も譲らぬ強固な陣容を布いて居り、此処の総務局長は仲田見氏である。仲田氏は橋本隆正、今村冬二郎氏と同期に轡を並べて鈴木商店へ入店した辰巳会員、当然囲碁部のメンバーである。商売柄、強い強くないの、アマ六段と称しては居るがセミプロの腕前で此の人に歯が立つ者は一人もない。その仲田氏の肝入りで関西棋院は辰巳会を特別扱いをして呉れるので大変気安く、棋院創立当初から特別会員として辰巳会からも、煙石隼人、相浦浩、今村冬二郎の諸氏が賛助入会して居る。ざつと見渡しただけでもこんな恵まれた背景を持ち、常連会員も三十人を越す程盛況な囲碁部であるがその反面未だにあやふやな煮え切らない性格も持ち合せて居る。何しろ親睦第一主義がモットーだから鹿爪らしい規約等もなく堅苦しい事は一切抜きで大変和やかなのが自

なつて手筋の冴えが目立って来たから不思議でたまらない。他で少々陰口をたたいて居ても「勝手にしやべつて居れ」と云わんばかりで生なかの事では動ぜざる事山の如しである。私は二子局で打つがきり／＼舞いをさせられる、帰り際の一言が憎い「御馳走になつて碁に勝たせてもらひ、今晚もよう寝られますわい……」。二人は白黒交互の手合いである。私に對する時はよく「今日は一寸調子が悪いので勝てる気がしないが、まあ、折角の事だからほんの小手調べのつもりで……」と先づ私の出鼻をくじきにかかる。うっかり真に受けよう物ならひどい目にあわされる。早打ちの名人でつい先方のペースに引き込まれ辛き目を見る。皆、大事な先輩だと思いつつも敗けた時の皮肉は痛烈にこたえる。武井一郎とは全く互角なので白番で勝てば一点と云う採点法を定めたら途端に数点借りが出来てしまつた。テキはゴルフ以外の日は大毎会館と清交社通いの後先必ず当方へ来る事になつて居るので一番出勤率がよい。橋本賀一郎は実力二段を有しながら何うしてもハンディーを出そうとしない。それ処か上手な殺し文句を並べて舌戦と

の二面作戦を用いいつも極どい所でひっくり返される。一枚も二枚も上わ手だと自戒しつつ地団駄をふむ思いがする。総て力の世界では情無用のきびしさが又たまらない魅力でもある。頭のリクレーションにはこんな適当な遊びはない。そして囲碁狂の間では無邪気とも云える常識を超えた論理が罷り通るから面白い。つい先日こんな多愛ない話があった。

東京支部の広岡一男氏(本店外国電信部、浪華倉庫下関支店長)が、早くから関西で囲碁部をやって居る話を聞いて親しい友人の、宇津木亥一氏に「黄旗の棋力は何れ程のものか」と聞いたものだ、二人共、私に取っては頭の上がらぬ相手だがそれで居て少しも気のおけない兄貴分である。若い頃から豪快な気風が似て居て口の悪い処迄一緒である。宇津木氏は「あれの棋力なんて大した事はない、初段と云っても辰巳会だけの話で、辰巳会には初段以下はないのだから……」位の事を云ったものである。それからと云うもの、広岡氏は逢う度に一局やろうと再三再四挑戦をふつかけて来るのだが何しろ相手は日本棋院二段の免状持ちである。私の様なインチキ初段と違つて正規の場数をふんで来て居る。う

かうかして東京で迄恥をかくのも心ない業と其所は態よく逃げ廻つて居たが遂に氏は一計を案じて手紙でこの様に云つて来た。

「六月の初め頃に、私の関係して居るM工業会社のI課長が商用で大阪へ出張するので其の序に君の事務所へ差し向ける。同君は私に二目置く力量だからそのつもりで一度手合せする様に——」と自分の門弟格の人を偵察戦によこして来た訳である。いくら何んでも初めての遠来客に後を見せる訳にも行かず私は観念のホゾを定めて対局した。そして見事に二局敗退した。幸い、控えに武井が居たので三局目の相手をしてもらつたが、I氏は旅のつかれもあつたのか武井には勝を譲られたので大阪方全敗の憂き目だけはまぬがれた。私は広岡氏の喜ぶ顔が目につぶ様でいま／＼しかつたが涙を呑んで委しくフェアに報告した。案の状、自分の愛弟子が関東の名声を保持した事を大仰に喜んで私を口惜しがらせたが、負ける事にならされた私は蛙の面に水程も感じないと十八番の負け惜しみを吐いておいた。東京には、田代義雄、難波寿一と云う強豪が居る。二人共、私と同期に鈴木商店へ入店した兄弟仲間だが二人

の前では碁は語れない。両名共、棋院三段の実力者だから首がすくむ、他にも名だたる碁客が多勢居る筈だろからうっかり大風呂敷を広げる訳にも行かず恥の上塗りになつてはならじと鳴りを静めて居る。田代君が下阪の折り、今村、橋本知、私と四ツ車で渡り合つたが矢張り歯が立たなかつた。

(四)

昭和三十九年四月、辰巳会囲碁部が誕生した時只一人日本棋院五段の免許を持つて居られたのは橋本隆正氏であつた。氏の提唱と尽力で同好の士三十有余名が第一回の競技会を開いてから早十周年を迎えんとして居る。隆正はんは間もなく石から遠ざかれたので筆者は残念乍ら僅か二局しか対局し得る機会がなかつたがその何れもがず／＼と貫録におされた様な負けに終つた。僅差の惜敗だつたのもう一ふんばりして居たら或いは等と力んで居たが何ぞはからん隆正はんはちゃんと終局迄読み切つて居て少しも無理なく確実に数目を余して居られたのだから気の付き様がおそかつた。私の様に二十目も三十目も取らないと勝つた様な気がしない碁とは根本から違つて居た。対局数が少かつたので印象の浅

いのが残念である。大橋本の囲碁観は「あく迄趣味と勝負事以外の何物でもない」と達観し「そこに修養だの鍛練だのを見出す様になればそれは早達人の境地である」と喝破して居られる。將に我々囲碁雀に取つて傾聴に値する名言である。

柏原真砂四段が亡くなられた時、仲田氏の計らいで関西棋院から大屋総裁並に役員高段者連名の「五段追贈」免状が贈られた。昭和四十年の春まだ浅い日、私は桐箱に入った免状を持参して神戸市灘のお宅に参拝、霊前に捧げた。留路未亡人は「故人に対する何よりの手厚い贈り物です。」と感謝の言葉を述べられた。その故でもあるまいが事後夫人は辰巳会の例会には欠かさず出席して下さる様になつた。囲碁部のささやかな功績かもしれない。関門のトリオ、浅壁豊造、金子三次郎、源島重雄の三氏共今は亡い、関門の中でも主に門司の方の主役達で我が囲碁部での重要な存在であつた。四十年八月の或る暑い日、一行九名で高野山の宿坊で碁会を開いた時の事、亡くなられた木村謙三三段が進んで引率役を勤められ早朝から奥の院へ参拝した。浅壁氏は余り壮健な方ではないのでこの四軒程の山道に疲れ対局を放棄

せられたが、丁度私が持参していた疲労快復剤のアンブルを服用した処忽ち元氣快復、優勝をさらつてしまつた。「今日の賞品は半分黄旗君にわけんといかんア」と大笑せられたのが思い浮かぶ、同氏は以後五段に昇格、常に抜群の好成績を取められた。門司時代、同地方の庭球チャンピオン、百人一首のかかる取りも有段者と云う万能選手で行くとして可ならざるなき人、惜しむらく健康勝れず四十四年六月他界された。

沢村亮一、木村謙三、金子三次郎の大先輩連は晩年少し棋力が衰へられたが大会には必ず出席、勝負にはこだわらず淡々と対局を楽しんで居られた。三氏の見えた時の碁会は春風駘蕩として和氣つきぬ風情があつた。春日季彦、横関利衛の両氏も囲碁部記録のアルバムに在りし日の姿を残して居て下さる。創設以来九名の先輩を御見送り申上げた。

辰巳会囲碁部の先覚諸霊位に謹んで御冥福の祈りを捧げるものである。漸が少ししめつぽくなつたが明朗な話題は数へ切れない。辰巳会の平均年齢が七六・五歳と発表されたが囲碁部も亦その範疇に入る。昨年、大阪のある老人福祉センターで碁会を開いた時、全員が有資格者である

のにはセンターの係員がびっくりして「何と立派な敬老会ですなエ」。と褒めてくれたら誰かが「敬老会の敬は警戒の警やかから、氣いつけなあきまへんで」と笑わせた。長寿番付の最高峰横綱格の武藤作次翁はもう碁会には足を運んでは下さらないが、「畳の上で座つて打つのは体がえらいのであかん。椅子に腰をかけたならやつてもよい、神港倶楽部か船舶会館なら何時でも案内するよ。」と云われる。この先、五年も十年も碁石を握つて頂き度いものだ。現役での最年長は何と云つても、「とう年取つて……」の大幡久一三段である。同じ三段の矢倉林三氏と一緒にゴルフの方が重点で、両方の会期がダブルと何うしてもゴルフの方に取られてしまう。大幡さんは私より一廻り上の辰年であるが未だに年令の開きがちまらず世事万端から碁に到る迄、総て子供扱ひのまま平行線をたどつて居る。須磨の双壁田中季男三段と植木寿二段は部の中堅として何時も重厚な棋風を展開。植木氏は関西棋院から棋士を招聘して常に研究を怠らず自ら七十の手習いと称して居られる。太陽鉱工からは松岡俊一、中島謙一の両氏。東邦金属からは高畑薫幸、金子甚蔵、福沢有一、

横田弥寿の諸氏が参加して常に囲碁部会の発展育成に惜しみなく側面援助を續けて居て下さる。茲にも大橋本の余沢を見る思いがする。棋客列伝のあらましである。

(五)

碁の本来、中国には古くから伝わる「玄々経」と云う囲碁の聖典がある。「玄より発でて玄に還る」と謂う意味だそうであるが、辞書を引くと「玄とは天地万象の根源となる絶対の究極」であつて「其の表わす色は深黒」とある。私にはむつかしくて何の事かさつぱり判らないが近世で玄が黒として普及して居るのは数しれない、奈良の古墨の銘に「玄之又玄」と云うのがあるが黒いが上に黒いと云い度いのだろう。何故こんな事を書き並べてしたり顔をして居るかと云うとこれには私なりに一寸した訳がある。私等の若い頃、習字の手にして居た三体千字文の冒頭に、「天地玄黄、宇宙洪荒、日月盈昃、辰宿列帳」と云うむつかしい字句がある。意味の事はさて於いて私は妙にこの玄黄と云う字に、こだわりを感じるのである。下手な駄洒落ではないが自分の名の上に玄がつくので、これは何うやら黒とは余程深いつながりがあるのかもしれない

と考へ、それならそれで一そ、玄を礼讃する腹にならうと定めた訳である。序の事にも少し自家発電の御許しを頂いてメーカーを廻転させて見よう。

角力の本場所の土俵には四本柱がなく今では、青、白、朱、黒の房が天井屋根から四隅に垂れ下つて居る。青龍、白虎、朱雀、玄武(亀)を表わして東西南北の位置を示す。この四方の守護神が、持国、増長、広目、多聞(毘沙門)の武神で四天王である。黒房の神様は毘沙門さんでこの神さんを信心すると勝負事に御利益があると云うので昔から信貴山や、大阪日本橋三丁目の毘沙門さんには碁打ちや勝負師の御参りが絶えないと云う。角力取りはさしづめ白星にあやかる様、増長天を拝めばよい、又、之を四季になぞらへて、青春、朱夏、白秋、玄冬となつて居るが、青春は日常語化して固有名詞となり、白秋は詩人北原の独占する処となる。以上、ごて／＼と玄に関する拾い読みを点描しては見たが、所詮黒から解放されそうもない私にとつて、黒こそ我が生涯の伴侶なりと観念の臍を定めた訳である。鳥の鳴かぬ日はあつても碁石の音がせぬ日はないと云へば、ちと誇張が過ぎ

るが、誰かがいつも私の部屋で鳥鷺を斗わせて居る。私の鳥が鷺に変身する事は到底望むべくもないのは絶えず白鷺の長いくちばしでつつきさいなまれて悲鳴をあげ続けて居るか

らで、それこそ「鳥の鳴かぬ日はあつても、鳥の悲鳴の聞えぬ日はない」と洒落にもならぬ変な繰り言でこの稿を結ぶ事とする。
(第四話完)

金子直吉学長の思い出

松井 タケヨ

正月二十一日に辰巳会本部で金子直吉様の三十年祭が行われるとの事を鳴内幹事さんからお聞きして



▲町田三郎氏描く「金子直吉翁肖像」

昔主人から大金子様のお話を聞かされていた頃が懐しく思い出されてその事を書かせて戴きます。鈴木商店では若い人達が大金子様らの薫陶で多数の人材を出されたので鈴木商店のこの人達は恆に「金子大学卒業生だ、僕自身も金子大学生の一員だ」と誇りを感じておりましたので金子様の事をこの度「学長の思出」と題しました。

先ず第一の事は、或る時会社で主人が学長のお伴をして商売を見習っておりました頃の話であります。学長が内柴町時代のお若い頃、砂糖袋の受渡しの看貫を受け持たれた時、売り方の仲仕が看貫に足をのせて行くのに気付かれ、計りがピンと上る

ので学長の細い目が光り出し、看貫が終り問屋の店員が総計何貫何程と口に出した途端「おい今日は仲仕の脚のこらずおいて行け、お前達にはだまされんワイ」と申され、相手の顔を真赤にさせました。つまり商売の受渡しには細心の注意が肝要だと云う事を説かれました。

☆ 喜びあつた頃が今尚楽しく思い出されます。(故松井元氏未亡人)
四八、一〇、一六 大安日記す

世にあらせられた時は天下を動かされた学長。鉄ぶち眼鏡を通したあの細い眼と髪を短かく刈られた頭で如何に商法にたけていられたか非凡と云うよりことばが生まれません。



☆ 平和記念絵葉書
通信発行大正八年七月一日

日本精化株式会社

取締役社長 和井田 統一郎

神戸市東灘区本山南町
四丁目四番二六号
電話神戸(078)451-3981(代)



東洋プラス スクリュー株式会社

取締役社長 藤岡 清俊

本社茅ヶ崎工場 神奈川県茅ヶ崎市室田100番地
電話 茅ヶ崎 3111代表

輸出入・国内販売



帝人商事株式会社

取締役社長 西田 博

本社 大阪市東区南本町1丁目13番地
支店 東京・足利・福井・京都
営業所 名古屋・岐阜・桐生・三原・岩国・徳山・松山
海外事務所 ニューヨーク・ハンブルグ・バンコック・ジャカルタ・ホンコン・ソウル

自動車用各種ホース・高圧及び超高圧ホース・ライニング・エキスパンションジョイント・塗料・ナイロンコーチング



日輪ゴム工業株式会社

取締役社長 鈴木 治雄

本社 神戸市生田区江戸町98 江戸町ビル3階
TEL 331-6543
工場 姫路・厚木
支店 東京

豊かな経験—すぐれた技術



帝人製機

大阪本社 大阪市東区北浜3-7-3 ☎(202)0371
東京本社 東京都中央区銀座6-14-4 ☎(543)4611

営業 省力機械 油圧機器 工作機械
品目 化繊合繊機械 航空機部品

砂糖・麦粉・澱粉・水飴・食用油 卸商

会社創立 昭和21年1月
資本金 1,000万円

三友商事株式会社

代表取締役 牧野 豊二

小樽市花園4丁目14番5号
電話 代表 23-6216

謹賀新年

昭和49年 元旦

会社専用宿泊ルームを計画しております
御利用の方は御相談下さい
芦屋市前田町七-14
男子学生寮(有) 藤田コーポ
藤田 健作
電話(078)三三三〇五五